平成２５年度研究成果報告書《平成 25 年度教育課程研究指定校事業》

都道府県・指定都市番号	４３	都道府県・指定都市名	熊本県
学校名（ふりがな：やまがしりつやまがちゅうがっこう） （生徒数）	山鹿市立山鹿中学校 （６９９人）		

（本研究に係る問い合わせ先）
所在地：熊本県山鹿市山鹿４４６番地
電話番号：０９６８－４３－１１８５
研究内容等を掲載しているウェブサイトの URL：　http://jh.higo.ed.jp/yamagajh/

【研究成果のポイント】

○研究課題番号：３中学校
○研究対象教科等：国語
○研究のキーワード：　既習事項の活用，言語活動の充実，指導と評価の一体化
　　単元構想表の活用，授業アイディア例の活用
○研究成果のポイント：

授業中に既習事項を確認したり，解決の見通しをもったりする場面を設定することで，生徒自身が目的をもって文章を読み取ることを促した。また，事前に教科書の説明的な文章で，生徒が知識・技能として身に付ける内容の洗い出しを行い，それを単元の終末段階で，生徒が一覧表にまとめ，検索できるようにした。

【研究の目的，研究内容】

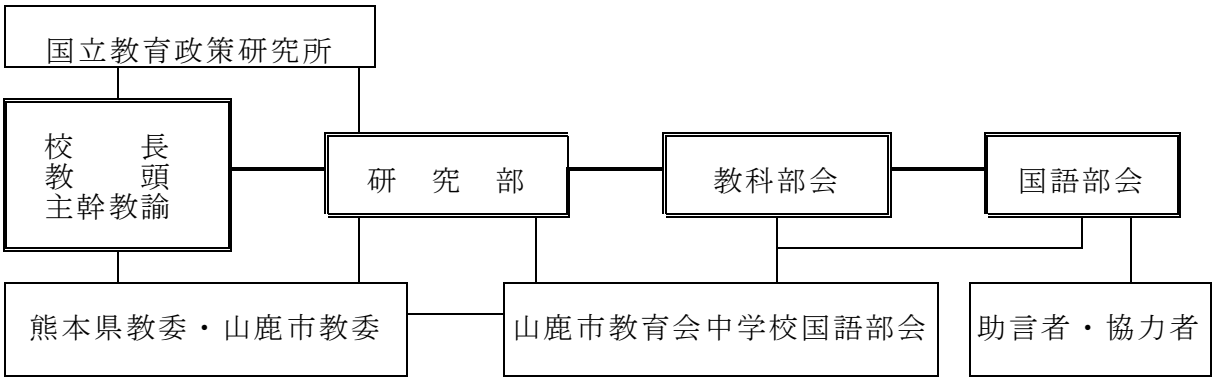
（１）研究主題

生徒が目的や意図に応じて主体的に文章を読み取る指導方法の実践的研究

（２）研究主題設定の理由

学習指導要領総則では，「基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ，これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力その他の能力を育むとともに，主体的に学習に取り組む態度を養う」ことに努めなければならないことが示されている。国語の学習でも課題解決に適した手段を選んだり，表現の仕方や文章の特徴に注意して目的に応じた読み方を身に付けたりするなど，生徒が主体的に思考・判断したり，表現したりするような学習を推進していく必要がある。本研究は，生徒が既習事項を活用しながら自ら考えをもち，生徒相互に学び合い考えを深めながら，指導事項に示した内容を確実に身に付ける授業を構想する。生徒の理解を促し，主体的に学習に取り組む態度を養うための指導方法の工夫改善に関する実践に役立てようとするものである。

（３）研究体制



（４）１年間の主な取組の経過

平成25年度	４月～５月	理論研究（本研究の構想及び研究組織作成，研究計画作成）
	５月～12月	全校生徒を対象にした生徒質問紙による実態把握（５月，７月，12月：全学年）
	５月～７月	研究授業（５月10日：1年，６月５日：１・３年）
	７月９日	講師招聘による授業研究会（１・３年　　講師　冨山　哲也調査官）
	８月	校内研究推進委員会，全国学力・学習状況調査結果分析
	10月４日	山鹿市教育会中学校国語部会授業研究会（１年）
	10月25日	小中連携に係る授業研究会(２年)
	12月	熊本県学力調査結果分析
	１月	研究授業（1年）
	２月	研究のまとめ

（５）具体的な研究内容・方法，研究を進める上での工夫点等

① 生徒の全国学力・学習状況調査の結果と質問紙の回答状況を活用し，生徒の実態を把握し授業改善の方向を探った。

② 効果的な言語活動を設定するとともに評価計画を立て，単元構想表にまとめた。このことで，評価の時期，評価方法，指導を要する生徒への手立てについて改善が見られた。

③ 事前に，教科書の説明的な文章で，生徒が知識・技能として身に付ける内容の洗い出しを行った。授業中の課題を把握する場面では，課題に関連する既習事項を確認したり，解決の見通しをもたせたりした。終末段階では，学習を振り返る時間を確保し，生徒の言葉で学習内容をまとめていった。また，課題解決で「努力を要する」と判断した生徒の指導の手立てとしても既習事項を活用した。さらに，単元で身に付けるべき知識・技能を生徒が一覧表にまとめ，検索できるようにした。

④ 授業アイディア例の学習の流れを参考にしながら，指導のねらいを具現化できるようにした。また，説明的な文章の内容や論理の展開を整理する図の型を示したことで，繰り返し使うことができ，生徒が内容を捉えることの一助となっている。

【研究成果とその意義等】

（１）研究成果

① 課題を解決する際に，既習事項を確認したり，課題解決の見通しを生徒にもたせることで，課題を解決しようとする意欲が向上し目的をもって文章を読むなど主体的な活動が目立つようになった。

② 多くの生徒が学習の目的を意識して活動するようになり，主体的に学習に取り組もうとする意識が芽生えてきている。しかし，学習意欲が高く，積極的に活動していると回答した生徒は少なく，生徒一人一人の能力に合わせた課題を設定していかなくてはならない。

③ 単元で身に付けるべき知識・技能を一覧表に整理する際に，年度当初は学習用語を中心にまとめていた。しかし，まとめたものを繰り返し使えないこともあり，比較をしながら読むなどの技能を中心にまとめるように変えていった。既習事項の整理の仕方については，さらに工夫が必要である。

（２）研究成果の意義等

① 全国学力・学習状況調査の結果及び質問紙の回答の相関をみることで，情意面を含めた生徒の学習状況や課題を把握することができ，授業の工夫改善の一助になる。

② 生徒に既習事項を生かして課題を解決するための見通しをもたせることで，目的や意図に応じて文章を読み取ろうとする生徒の育成が図られる。

（３）指定期間終了後の取組

研究の成果や課題を山鹿市教育会等で報告し、課題解決的な言語活動の充実を図る。